

翻 訳

ビセンテ・ウイドブロ 『北極の詩』 (抄)

Vicente Huidobro *Poemas árticos* (extracto)

鼓 宗 訳

traducción y prólogo: TSUZUMI Shu

Sumario

Poemas árticos de Vicente Huidobro, escrito en lengua castellana y publicado en Madrid en 1918 con sus otras importantes obras, *Tour Eiffel* y *Halliali, poème de guerre*, ambas en francés, y *Ecuadorial*, un poema largo también en español, inaugura el vanguardismo en ese idioma. El libro influye a la joven generación española, con poetas como Gerardo Diego y Juan Larrea, a quienes les inspira el movimiento vanguardista del ultraísmo. En *Poemas árticos* se puede apreciar la típica técnica cubista y de tipografía, lo que sorprendió a los futuros ultraístas. Aquí traducimos las primeras piezas del poemario, en que destaca 'Exprés', uno de los poemas huidobrianos más representativos de la época.

はじめに

ここに訳出したのは、チリの詩人ビセンテ・ウイドブロの詩集『北極の詩』*Poemas árticos* (1918) Madrid, Pueyo に収められた詩 42 編のうち、最初の 12 編である。底本には、Huidobro, Vicente. *Obras completas de Vicente Huidobro: tomo I*, prólogo de Braurio Arenas. (1964) Santiago de Chile, Zig-zag を用いたが、他に Huidobro, V. [autor]: Goic, Cedomil [ed.] *Obra poética*. (2003) Madrid, Barcelona; La Habana; Lisboa; París; México; Buenos Aires; São Paulo; Lima; Guatemala; San José; Caracas; ALLCA XX, Huidobro, V. *Poemas árticos*, prólogo de Lucía Vodanovic (2008) Santiago de Chile, Universidad Diego Portales の 2 冊を主とする他の版も適宜参照した。

『北極の詩』は 1918 年にマドリードで、『エッフェル塔』*Tour Eiffel* (1918)、Madrid, Pueyo、『アラリ、戦争の詩』*Halliali, poème de guerre* (1918) Madrid, Jesús López、および『赤道』*Ecuadorial* (1918) Madrid, Pueyo とともに刊行された¹⁾。ウイドブロが渡欧したのは 1916 年の暮れのことであったが、その時までには故国チリで 4 冊、渡欧の途中で立ち寄ったアルゼンチンで 1 冊の詩集を発表していた²⁾。翌 1917 年、ウイドブロは『四角い地平線』*Horizon carré*

(1917) Paris, Paul Birault を刊行したが、これは『楕円形の天窗』の詩人ピエール・ルヴェルディが主宰する前衛誌『北・南』^{ノール・シンド}での活動を通じて得た新しい方法論に則ったものであった。クレアシオニスム(創造主義)の名前を与えられたその詩学は、1916年の『水鏡』に始まるもので、長詩『アルタソル』*Altazor o El viaje en paracaídas* (1931) Madrid, C.I.A.P. でひとつの頂点を迎えることになる。「詩人は、詩のなかにしか存在しえないものを創造しなくてはならない」というその主張は、『北極の詩』にも詩的キュビスムというかたちで反映されている。

『北極の詩』の刊行の経緯に話を戻すと、1918年のマドリッド訪問は詩人にとって二度目の機会であった。南アメリカ大陸からスペイン南部の港町カディスに到着した後、パリに移動する途中で立ち寄った最初の折が一ヶ月にも満たなかったのに対して、このたびの滞在はもう少し長く、7月から9月にかけてのほぼ三ヶ月に渡っている³⁾。

一時的にせよウイドブロがフランスの都を離れたのは、パリに迫りつつあった第一次世界大戦の戦火を避けるためで、マドリッドにたどり着く前には、トゥール近郊に所在するボーリウ・プレ・デ・ロッシュで過ごしている。この時、避難生活を共に過ごしたのが、リトアニア出身の彫刻家ジャック・リプシツとスペイン出身の画家ファン・グリスで、その僻村で彼らと家族ぐるみの付き合いを持った。『北極の歌』の冒頭に載る二人の友人への献辞は、その時の思い出に寄せたものである。

ことにグリスは、マドリッドの出身だが、ウイドブロよりも先にフランスに移り住んでおり、正規な教育こそ受けていないもののその言葉にも親しんでいたため、パリにいた頃からウイドブロのフランス語での詩作のよき協力者となってきた。それは単にスペイン語をフランス語に移す手伝いという程度のもではなく、むしろ新しい詩とはどのようなものであるべきか、それを協同で探求する同志ですらあった。前作『四角い地平線』という表題をウイドブロに示唆したのもグリスであり、『北極の詩』のいくつかの作品にもその協力の跡が残る。

グリスやルヴェルディとの関係をはじめとする、パリでの詩人や芸術家たち——アポリネール、エリュアール、コクトー、ブルトン、ピカソ、エズラ・パウンド、ガートルード・スタインら多様な顔ぶれ——との交流はウイドブロにとって、チリで温めていた新しい詩についてのアイデアを強力に刺激し、それをさらに発展させる契機となったに違いない。実際、先に挙げた『四角い地平線』の前半は、『水鏡』の詩をフランス語で書き直しているが、スペイン語の原詩のままの翻訳ではなく、句読点が廃されるなど、より大胆な装いになっている。

そして『北極の詩』は、その『四角い地平線』の延長線上にあるが、スペイン語で書かれたこの詩集は、『赤道』とともにその言語による前衛主義の始まりを告げるものであった。そこでウイドブロは、逸話的な要素を可能な限り排して、言葉そのものが内包するイメージを重視している。時に思いもかけない断絶やずれを生み出しながら、単語を並置するそのあり方は、まさにキュビスムの詩の典型である。さらに極端なインデントを行ったり、斜めの行を挿入したりすることで視覚的な効果が強調されており、一行目から最終行へと線的に読まれるのではな

く、それぞれの言葉が同時に目に飛び込んでくる様はまるで一枚の額絵を見るようである。それは示唆的な表題を持つ『四角い地平線』で採用した手法の延長線上にあり、ある意味で「新しく」はない。しかし、グリスはウイドブロの以前の作品や、同時に出た、同じ手法がきわめて高い完成度で採用された長詩『赤道』よりも、この『北極の詩』のほうが「よりすばらしい」と、すくなくとも「自分にとって理解し得る」ものであったとウイドブロに宛てた書簡で評している。

ウイドブロがこの詩集に載せた詩編は、「額絵」として鑑賞されることを意識してか、どれもが短い。比較的長い「急行列車」でも、2ページに収まってしまふ程度の40行に過ぎない。そのことが、本質的に斬新な詩を、新しい手法に不慣れな読者にとっても分かりやすいものにしてしている。またグリスが指摘していることだが、用いられる単語も、観念的で日常になじまない、奇を衒ったようなものではなく、より詩人の身の丈に応じた平易な言葉になっている。キュビズムの画家が『北極の詩』の美点であるとするこの特徴は、パリとは違い、この種の詩に対して一切の免疫を持たなかったスペインの詩人たちのあいだに熱心な支持者を得た一因となった。そうしたなかで誕生したのが、スペインにおける最初の前衛主義ウルトラリスモである。彼らは、シュルレアリスムがその中心に常にブルトンを抱いたようにはウイドブロをその懐に迎えることをせず、むしろ反力を高めていったが、1922年に機関紙「ウルトラ」が廃刊となり運動が解消した後、スペイン詩の底流にその反響を残した。

ところで、『北極の詩』に限らずウイドブロの初期の詩集は私家版的な性格が強く、それを入手するのは一般に容易でなかったはずだが、それを補うために手書きされた写しが、ことに若い詩人たちのあいだに出回ったという。そのような熱意がもたらした幸福な出会いの例として、ヘラルド・ディエーゴとファン・ラレーアの場合が挙げられる。二十世紀のスペイン文学に占める〈二十七年の世代〉の詩人たちの重要性はここにあらためて繰り返すまでもないが、この詩派を代表する一人のディエーゴ——ウルトラリスモにも参加している——は『北極の詩』から筆写した数編の詩を、やはりこのグループに名を連ねるラレーア⁴⁾に読ませた。同じ機会にラレーアは、ウルトラリスタたちの「ギリシャ」も渡されていたのだが、同胞の追従者たちの作品以上に、ウイドブロの詩集に圧倒的に強い感銘をおぼえたという。ディエーゴとラレーアの二人はいずれウイドブロと友情を結び、一時期は、クレアシオニズムの影響のもとで自らの詩の営みを行うことになる。

以上、簡略に触れたのみだが、『北極の詩』の詩編が、二十世紀のスペイン語詩が発展する過程で重要な役割を果たしたことに疑いを入れない。この記憶にとどめられるべき詩集の全編を、今後、この紀要の誌上を借りて引き続き紹介していきたい。

注

- 1) この時、*Espejo de agua* (注2を参照)も再版している。
- 2) *Ecos del alma* (1911) Imprenta Chile, *La gruta del silencio* (1913) Universitaria, *Canciones en la noche* (1913) Imprenta Chile, *Las pagodas ocultas* (1914), *Adán* (1916)ともに Universitaria は、いずれもサンティアゴ・デ・チレで出た。他方、*El espejo de agua*. (1916) Orión の出版地はブエノスアイレスである。
- 3) この間、ウイドプロはラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナが1912年以來、同地のカフェ・ボンボで開いていたテルトゥリア(文人たちの集会)の常連のひとりとなった。同様に強い影響力を誇るテルトゥリアを開いていたラファエル・カンシノス=アッセンス——ウイドプロのマドリッド訪問を「その年の最大の事件」と呼んだ——とも親しく交わった。そうした場所に入出入りする一方、その自宅も熱心な信奉者たちが集まるサロンと化していた。
- 4) 厳密に言えば、ディエーゴがガルシア・ロルカやラファエル・アルベルティと並んで、常にこのグループの主要な詩人とされるのに対して、寡作で、多くの詩をフランス語で書いたラレーアは、少なからぬ場合にそこから外される。

北極の詩

フランスのあの片田舎ⁱ⁾で夕暮れに語り合った思い出とともに、
ファン・グリスとジャック・リプシッツに捧ぐⁱⁱ⁾。

時間

田舎町

何もない野に停車する列車

どの水たまりにも

耳の聞こえない星々が眠っている

そして水面が揺れる

風に吹かれるカーテン

木立に垂れる夜

花が覆う鐘楼で

生きた雨染みが

星々の血を流す

時折

熟した時間がⁱⁱⁱ⁾

命の上に落ちてくる

エクスプレス
夜行急行ⁱⁱⁱ⁾

ぼくは王冠を造る
巡ってきたすべての都市で

ロンドン マドリード パリ
ローマ ナポリ チューリヒ

平原で汽笛を鳴らす
藻に覆われた機関車たち

ここでぼくは誰にも会わなかった

航行してきたすべての河で
ぼくは首飾りを造るだう

アマゾン河 セーヌ河
テムズ河 ライン河

翼を畳んだ
百隻の物知りの船

そしてぼくのうたう親なしの船乗りの歌が
岸边へと別れを告げる

モンテローザの芳香を胸にため
モンブランのまとまらない白髪を編んでやり
そしてモンスニ^{iv)}の〈頂〉に立って
消えゆく太陽で
最後の葉巻に火をつけよう

汽笛が空に穴を穿つ

水遊びではない

前に進め

瘤を背負ったアペニノ山脈^レが
砂漠に向かって行進する

オアシスの星々が
ナツメヤシの蜜をぼくたちに分けてくれるだろう

山では
風が索具を
すべてのそびえ立つ峰々を軋らせる
存分に充填された火山が
錨を上げるだろう

あそこで誰かがぼくをきっと待っている

どうぞよい旅を

もう少し先が
地球の果てだ

船の下を河が流れる
人生とは流れるものだ

咲
き
明
く

夜

雪の上を夜が滑る音が聞こえる

歌が木々からこぼれていた
そして霧の背後で声がしていた

ぼくは視線でタバコに火をつけた

口を開けるたび

ぼくは空間を雲で満たす

港では

マストはどれも巣に覆われている

そして風が

鳥たちの翼のあいだでひゅうひゅうと鳴る

波が死んだ船を揺らす

ぼくは岸壁で口笛を吹きながら

指のあいだで煙を立ち上らせている星を見つめる

警告

真夜中

庭では

どの影もが小川となる

あの近づく音は自動車などではない

パリの空の上

オットー・フォン・ツェッペリン^{vi)}

黒い波間で

セイレンたちが歌う

そして今呼んでいるこのラッパは

ビクトリア^{vii)}のラッパではない

百機の飛行機が

月の周りを飛ぶ

おまえのパイプを消せ

曲射砲弾が熟したバラのように炸裂する
そして爆弾が日々に穴を開ける

途切れ途切れの歌が
枝のあいだで揺れる
風が街路をゆがめる

池の星をどうやって消せというのか

道

空っぽの葉巻

道に沿って
ほくは自分の指を撒く
そしてけっして後ろを見るな
ほくの髪

そしてこのパイプの煙

あの光がほくを導いていた
翼のない鳥たちがそろって
ほくの肩でさえずった

けれども僕の疲れ切った心は
最後の巢で息絶えた

道に雨が降る
そしてほくは探して歩く

自分の涙が落ちた場所を

アメリカへの移民

電気仕掛けの星が
風のなかに灯る

そしていくつかの占星術の印が
海に落ちた

歌うその移民は
明日発つのだろう

生きること

探ること

十二宮図のごとく

船に縛られる

海上の二十日間

水面下を

植物のタコたちが泳ぐ

開かれた水平線の背後には

別の港が

茂みのあいだに

葉を落としたバラの花が

街路を照らす

歌たちのなかの歌

歌

日々

歌

彼女はあまりにも早くやってくる
その影が彼女を見つけられず
忘れられてしまうほどに

道で

親水性の雲たちが

木々の葉の頂で引きはがされる

雨

降雨の向こうには

太陽

歌の終わりに

誰かが歳月を倍に重ねるだろう

そしてぼくの腕のなかにきっとくずおれる

星^{viii)}

本

そして扉

それを風が閉ざす

煙の影と

遠ざかるこの真っ白なページを

のぞきこむぼくの頭

にぎやかな午後の喧騒を聞いたまえ

水平線の時計

いつまでも立ち込める霧の下で
ばね仕掛けの天体が独り言ちたのだろう

ぼくの寝室が船のように揺れる

しかし君が

君ひとりが
ぼくの天井装飾の星だ

ぼくは君の難船の記憶を見る

そしてあの無邪気な鳥が
鏡の水を飲むのを

子供^{ix)}

時間のうちにある

風が運び去る

雲の上にある

あの家

死んだ鳥が通り過ぎて行った

その羽が秋の上に落ちる

翼のないひとりの子供が
窓辺で見ている

{ スループが滑りゆく
マストの影の下で
魚たちは水を崩してしまうのを恐れている

母親の名前は忘れられた

旗のように

開いたり閉まったりしている扉の向こうでは
天井に星々の穴が開いている

祖父が眠っている

そのひげから

雪が少しばかりこぼれる

家

机の上に

やわらかい扇子

飛翔のさなかの死んだ鳥

石膏と雪の白さの

正面の家

見知らぬ庭を

誰かが歩いている

そしてうっかり者の天使が

煙突の煙の上で眠ってしまった

道を進み続けようとすれば

ふたたび歩み始めなければならない

誰が鍵を隠したのか

ぼくが見つけられなかったものはあまりにも多かった

道

最後の雨

傷を負った天使たちは
今日病院を離れるだろう

ぼくは歌いかけた歌を忘れてしまった

ぼくの胸から飛び立った鳥が
道を見失った

いくつもの橋の下

川が間隔をおいて死ぬ

おまえはどこにいるのか

ぼくの歌を追いかけるおまえの歩みを
干上がった湖のように

盲た道がたどる

星はすべて落ちてしまった
枝にぶら下がったものたちも
やがて傾いた茂みに
落ちてくるだろう

残ったのはぼくの歌だ

最後の雨

月とハンカチが
日向に干してあった

注

- i) 1918年に第一次世界大戦の戦火を逃れて、 그리스、リプシッツの家族らとともに避難した先である Tours 近郊の街、Beaulieu-près-de-Loches を指す。
- ii) Juan Gris (1887-1927) スペインの画家。キュビズムの可能性を追及し、パリで活躍した。ジャック・リプシッツ Jacques Lipschitz (1891-1973) リトアニア出身のキュビズム彫刻家。
- iii) 「急行」(部分)(木村榮一訳、モダニズム研究会編『モダニズム研究』(1994)東京、思潮社。pp. 474-475)と「急行列車」(坂田幸子訳、坂田『ウルトライスモーマドリードの前衛主義文学』(2010)東京、国書刊行会。pp.25-28)の先訳がある。
- iv) モンテローザはスイスとイタリアの国境に位置するベンニネアルプスの連邦。山名の「ローザ」rosa は、イタリア語ではスペイン語の同じ綴りの単語と同様にバラを意味し、「芳香」に結びつくが、山の名自体は現地のアオスタ方言で「氷河」に当たる rosia に由来するという説がある。モンブランは、フランスとイタリア国境にある、言わずと知れたアルプスの最高峰。むろん「白い山」の意。モンズニは古くからアルプス越えのルートの一つとなっている峠で、フランス南東部に位置する。二行後の「葉巻」への言及は、仏名 Mont Cenis からスペイン語の「灰」ceniza の連想か。「〈頂〉」の原語は Zenit となっており、これも山名の音に関連する。
- v) アベニノ山脈 イタリア半島をおよそ1,300キロメートルにわたって縦断するアルプス山脈の支脈。
- vi) 前行に「空の上」とあることから、飛行船のツェッペリン号のことか。フェルディナント・フォン・ツェッペリンが1898年に完成させた硬式飛行船は当初より軍事利用が想定されていたが、実際に第一次世界大戦でロンドンへの空爆に用いられた。
- vii) ローマ神話の勝利の女神。
- viii) 原語は一般的に「星」を表す estrella ではなく「天体」astoro。ウイドブロの詩には、この語が頻出する。
- ix) 先訳に「おさなご」(坂田(2010) pp.28-29)。

